



# 都市医師会 だより

## 小樽市医師会医政講演会

夕張に学ぶ高齢者の医療・介護を未来につなげる  
～地域包括ケアシステムの構築と住民参加～

- ・ 演 者：南日本ヘルスリサーチラボ  
代表 森田 洋之先生
- ・ 日 時：平成30年11月28日（水）18：30～19：50
- ・ 場 所：小樽市民ホール マリンホール

小樽市医師会 医療情報医療政策部 大本 晃裕

演者の森田洋之先生は、一橋大学の経済学部を卒業されたあと、宮崎医科大学に入学され、その後宮崎県内で卒後研修を受けたのち平成21年より故村上智彦医師を慕って夕張市立診療所に赴任するという経歴をお持ちです。4年間の地域医療を実践されたあと平成25年から鹿児島市において南日本ヘルスリサーチラボの代表として講演、執筆、診療に従事されています。

先生は、今までに「破綻からの奇蹟 ～いま夕張

市民から学ぶこと～」、「あおいけあ流 介護の世界」（介護の分野で有名な加藤忠相氏との共著）、そして「医療経済の嘘」の3冊の本を執筆されております。それらの著書の中でも書かれている、夕張での経験と、それに加えて経済学部卒業というバックボーンを生かした医療経済の面からの解析理論について、わかりやすくご講演いただきました。

ご講演の中では、亡くなる日の前日まで自宅で大好きなビールを飲んで大往生できたお婆さんの例をはじめとして、昔から住み慣れた街とそれまでの人生において築いてきた地域住民との絆の中で理想の終末期を全うした例を紹介されました。夕張という地域性がなせる業という見方もできますが、それをサポートするスタッフの意識が重要であり、独居であるということは在宅医療、在宅死を選択する上で全く支障にならないと言います。当小樽市も人口10万人以上の都市の中では突出して高い高齢化率（39.6%）を誇っており、市内においてはその地区ごとに住民同士の連帯感に差はあるものの、参考にすべき要素を数多く見出すことができました。

このことにより、夕張市立病院が閉院となりベッド数19床の市立診療所に転換したあとは、救急車の出動回数は激減し、また死亡率の増加も全くみられなかったという結果をお示しになりました。

このことは、救急車や病院のベッドは終末期の方の急変や看取りのために稼働するのではなく、本来助けるべき患者さんに対して多くの医療資源を投入活用されるべきという本来の姿を実際の地域医療の場において証明してくれたものと思われます。

講演後のアンケートにおいて、非常に勉強になった、他の医療・介護関係者だけでなく多くの市民にもぜひ聞いてほしい、という意見が多く寄せられたことを付記します。

